

二〇二三年度入学試験問題 (第二回)

国語 (五十分)

【注意】

- 一 この試験の問題文・設問は、1ページから16ページに印刷されています。
- 二 解答は、すべて別の「解答用紙」に記入しなさい。
- 三 文字は、正しくきちんと書きなさい。
- 四 、。、「」はそれぞれ一字と考えなさい。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

小学五年生の文は、学校から帰るとおとうさんが出してくる謎を解いて、おやつを食べることが日課だった。

ある日、学校で「文」という名前を男子生徒にからかわれてしまい、帰宅後も、イライラしながら謎を解いていた。

① 「高学年は宿題とか塾とか忙しいし。くだらない謎解きとか、もうかんべんしてよ！」

言った後で、はっとした。おとうさんがかたまっている。その顔は明らかにショックを受けていた。

文は顔をそむけ、マグカップと残りのパンをつかむ。ミルクテイがはねるのもかまわず、足早に自分の部屋へ引っこんだ。

三年生くらいまでは、文はおとうさんと大の仲良しで、お手伝いしたり遊んだり、悩みを相談したりもしていた……それが最近はおとうさんとの間で、文はおとうさんにいらっとする。自分の気持ちなのに謎だ。

次の日から、おとうさんはぱったり「謎」を出さなくなった。ダイニングにはちゃんとおやつが用意されていた。

る。でも、毒も縄もナイフも密室も、暗号もなし。

自分で頼んだくせに、文のお腹はかすかにちくんとした。

② 晩ご飯の後のお茶を飲みながら、文とおかあさんはソファでおしゃべりしていた。あれから、おとうさんとなんとなく話しづらい。でも、おかあさんには何でも話せる。

「あ、そういえば、バカ男子がいてさー」

名前をからかわれたことを話した。今は「おがわぶんぶーん」も平気で話せる。なんでわたし、あのとき、あんなに怒ってたんだらう？ 自分の気持ちなのにやっぱ謎だ。

「文って、どういう意味か教えたっけ？」

おかあさんの質問に、文はこくんとうなずいた。

「四年生のときに宿題で聞いた。文学とか教養とか、お勉強ができる感じ。わたしにぴったり。でも、もうちょいロマンチックでもよかったなー」

おかあさんは笑って、文の脇腹をひじで突つづいた。

「あるよー。あなたの名前には、ロマンスがたっぷりあるんだから……ねえ？」

おかあさんが振り向いた先に、おとうさんがいた。文が見ると、おとうさんはかすかに顔をうつむけ、おかあさんのそばの床ゆかにあぐらをかいて座った。

「文とは……手紙、の意味だ」

おとうさんは一口、手にしたカップのお茶を飲む。

「それもある特定の手紙。それがなければ、文はきっとこの世に生まれていなかった」

文はおとうさんの横顔を見つめる。ちよつとどきどきした。おとうさんの横顔を見つめる。ちよつとどきどきした。

「手紙？ なにそれ聞いたことない。教えて、おとうさん」

おとうさんは顔を上げ、ちゃんと文を見た。そして前と同じに笑った。

「おかあさんとおとうさんがまだ結婚けっこんする前の時代だ。いつも仲良しだったのに、ある日ふたりはけんかをした。原因が何かは忘れたが、おかあさんはかんかん怒って……」

「私は覚えているけどね。あれはユウくんが大事な約束をすっぱかしたの。私、ユウくんの部屋で三時間は待ったんだから」

<sup>B</sup>「おかあさんの冷たい言い方に、おとうさんはかなりあせったようだ。」

「えーつと、ごめん、ごめんねアキちゃん……おとうさんが急いで部屋へ帰ってみると、おかあさんは出て行ってしまった後だった。そのとき、携帯けいたいに運命のメールが入った」

「紙の手紙じゃなくて？」

「うん。その時代にだつてモバイル\*はあったさ。そこにはおかあさんが怒った理由がずらつと箇条書きかじょうがで並べてあった。その後に『これらの理由により、ユウくんは私をどうでもいい存在だと認識している』って」

「あはは、おかあさんだ」

文は思わず笑った。おかあさんは文のダメな行動をいくつも並べて、「これらの理由により、あなたは反省するべきです」とか何とか言つて、文を叱しかる。

「笑い事じゃないよ、文。おとうさんはこの世の終わりかと思つた。ところが、そのメールの最後にこう書いてあったんだ。『私の存在がどうでもいいわけじゃないのなら、私の手紙を見つけて。手紙は必ずユウくんの部屋の中にある』って」

「おお、『盗まれた手紙』じゃん」

文が言ったのは、ミステリ作家の元祖といわれるエドガー・アラン・ポーの小説の題名だ。文は直接本を読まないけど、おとうさんにあらすじを教えてもらった。人の心理の穴をつく、有名なトリックだ。

「おとうさんもポーの『盗まれた手紙』を思い出して、真っ先にそれに該当する場所を調べたさ。しかし、おかあさんの手紙はない。それから大変だった。クローゼットやラグにベッド、本棚からトイレの水洗タンクの中まで、思いつくところは全部見た。おとうさんのワンルームは、狭いながらもとても片づいていたんだけど、三十分後には竜巻に巻きこまれた後みたいになった。それでも、手紙は見つからない。おかあさん、いや、アキちゃんを失ったら本当にこの世の終わりだと、ぼくは床に、手とひざをついて絶望した」

文はちらつとおかあさんを見た。おかあさんは片手で口をおさえ、じつとおとうさんを見ている。あきれて笑いをこらえているのか、あふれる感動をおさえているのか……どっちかよくわからない。

「奇跡が起きたのはそのときだ。おとうさんがかすかに顔

を上げると、目の前に三つにたたまれた紙が置いてあった。百二十万回はチェックした床の上にだよ。こつ然とそこに出現したんだ。おとうさんはその紙をひつつかみ、震える手で広げて読んだ。そこには……」

「そこには？」

自分でも知らないうちに、文は身をのり出し、おとうさんの顔をのぞきこんでいた。

おとうさんの頬はかすかに赤い。

「列車の号数と時間が書かれていた。行き先はおばあちゃんち、つまりおかあさんの生まれた街だ。こうしちやいられない。おとうさんは両足を高速回転させて、稲妻みたいな勢いで駅に駆けつけた。X だった。ホームにい

るアキちゃんの腕をつかんだとき、ちょうど列車が入ってきた。ぼくは一生懸命説明した。ぼくにはアキちゃんが、アキちゃんにはぼくが、どれほどお互い必要なのか、百個ぐらい理由を並べた。そして言ったんだ。『これらの理由により、ぼくらは結婚しよう』って」

文はばちばちまばたきをして、おとうさんを、それからおかあさんを見た。

「その手紙が出てこなかったら、ふたりは結婚しなかつ

た？ わたしは生まれなかった？」

「その確率は高かったかもね」

おかあさんが澄まして答えた。

「あれ？ でも、どうして手紙が急に出てきたの？ おか

あさん、何かトリックをしかけたの？」

「それなんだよ、おかあさんはいくら聞いても教えてくれないんだ」

「世の中には、謎のままでもいい謎もあるの」

おかあさんはやっぱり澄まして答え、お茶を飲んだ。

文はその後もしつこく、おかあさんに手紙の謎を聞いてけど、教えてもらえなかった。それでも聞き続けたら、おかあさんの眉がだんだんゆがんできた……これは「撤退すべし」のサイン。

自分で考えるしかないか。でも、おかあさんは、本気でおとうさんから離れようとしたのかな？ 違う、と文はすぐに打ち消した。本気だったら、「私の手紙を見つけて」なんて回りくどいことは言わないはずだ。それに、今のふたりはとても仲がいい。せっかちで理屈っぽいおかあさん、のんびり屋で物語の好きなおとうさん。全然違うふたりだけど、本気でけんかしているのを、文は見ることがな

い。だからおかあさんは、おとうさんがすぐに見つけられるように手紙をセットしたはずだ。それもそんなに特別じゃない場所に。おとうさんと違って、おかあさんはそれほどミステリに興味がない……これらの理由により、文はある場所を思いついた。

ようし、実験で試してみよう。

3 次の日曜日のお昼過ぎ。おとうさんとおかあさんは買い物へ出かけたが、文は宿題があるからと言って留守番をした。

静かなリビングで、文は何やら紙に書きはじめた。言葉と気持ちがあかなか合わなくて、文の顔はだんだん赤くなる。何度も書いては消し、消しては書いた。やっとできあがった手紙は、封筒に入れられた。

ふたりが帰るなり、文は玄関に駆けつけ叫んだ。

「おとうさん、おとうさん、わたしの手紙を見つけて。必ずリビングの中にあります」

おとうさんは少しの間かたままった。その横で、おかあさんはかすかに口の端を上げる。

おとうさんは文を見下ろし、重々しい声で聞いた。

「文、それは、大事な手紙なのかな？」

まだ赤い顔のまま、文は大きくうなずく。

「うん、そうだよ。わたし、その手紙に、今一番おとうさんに言いたいことを書いた」

「よし、わかった。絶対に探し出す」

買ってきた荷物をおかさんに任せ、おとうさんはリビングへ向かった。

文の予想の百倍ぐらい、おとうさんは真剣しんけんに手紙を探した。三十分後にはおとうさんの話のとおり、リビングは「竜巻に巻きこまれた後みたい」になった。すべての引き出しや棚は中身がぶちまけられ、テレビもゲーム機もラゲもソファも、ひっくり返ったり、斜めななになったり、分解されたりした。文とおかさんはキッチンに椅子いすを運んで座り、カウンター越こしに、一部始終をながめていた。

それほど真剣しんけんに探したのに、手紙は見つからない。おとうさんはあはあ息をはずませ、ちらかった床の上にひざと手をついた。この姿を絵にしたら、ほとんどの人がきくと、「絶望」と題名につけるだろう。

文は自分がとても悪いことをしている気持ちになった。とうとう椅子から立って、荒れ果てたりビンゴへ出ていっ

た。その手には、コンベックス（金属製の巻き尺）があった。

「おとうさん、ちょっと待って。手紙が出てくるよ」

文がコンベックスの金属テープをしゆるしゆると真上に伸ばすと、ひらり、封筒が落ちてきた。おとうさんはそれを両手で受け止めた。

「ああ……そうか、そうか……天井てんじょうか……天井てんじょうだったんだね、アキちゃん」

おとうさんがしわがれた声で言うと、おかさんもキッチンから出てきた。

「ユウくん、ずいぶん長くかかったねえ。そのとおり、あの日も天井に貼りつけたの」

コンベックスのテープをしゆるんと戻もどして、文は口を  
んがらんがらかした。

「でも、わたし、おかさんみたいにうまくいかなかった。本当はこんな使わないうで自然に落としたかったんだけど」

「私だって、自然に落ちるとは思わなかった。昔からユウくん……おとうさんってしょっちゅう疲つかれたとか言っ  
て、そこらに寝ねっ転がるでしょ。だから、天井だったらす

ぐに見つかると思ったの。でも私の貼り方が雑だった。落っこちてきたのは、ただの偶然<sup>ぐうぜん</sup>」

「偶然?!」

おとうさんが裏返った声で叫んだ。

「アキちゃんは、大変な思い違いをしているよ。ぼくは確かに日頃、ごろごろしているかもしれないけど、アキちゃんや文の大事な手紙を探すのをあきらめて、途中<sup>とちゅう</sup>で寝っ転がったりしない。絶対にするもんか」

④ 三人でリビングの片づけにかかった。

片づけながら、文はずっと「偶然」について考えていた。もしも、おかあさんが手紙をもっとしっかり天井に貼りつけていたら。もしも、おとうさんがその時その場所<sup>ところ</sup>で顔を上げなかったら。わたしはここにいなかった。なんてか細い「偶然」なんだろう。まるで、建てかけの高層ビルの鉄骨の上で、目隠<sup>めかく</sup>したまま側転<sup>めが</sup>やスキップをして、それでも落っこちなかった<sup>E</sup>ぐらい、わたしは運がよかった。

リビングがなんとかもとどおりになってから、やっとお

とうさんが気づいた。

「わあ、いかんいかん、文の手紙をまだ読んでない!」

急いでテーブルの上の封筒を取り上げる。

とたん、文の頬や耳はかっとなくなる。あわてて自分の

部屋へ駆けこんだ。

おかあさんは不思議そうな顔で娘<sup>むすめ</sup>を見送ったが、振り返って微笑<sup>ほほえ</sup>む。手紙を読むおとうさんの手が震えている。

文の手紙は、とても短かった。

——また面白い謎があったら、受けて立つよ。おとうさん  
ずっと大好き。 文  
(櫻井とりお「文の手紙」による)

### 【注】

\*ロマンス——恋物語<sup>こい</sup>。

\*モバイル——小型のコンピューター。ここでは、携帯電話

話。

\*こつ然と——たちまち。

問一 — 線部 A 「文のお腹はかすかにちくんとした」とあるが、なぜか。理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア おとうさんは嫌いなのに、おやつは食べたいと思ってしまう自分に嫌気がさしたから。
- イ もうこの先おとうさんの出す謎が解けないのかと思って、悲しい気持ちになったから。
- ウ 勢いでおとうさんにひどいことを言ってしまう、傷つけてしまったことを後悔したから。
- エ 謎解きは出さないのに、おやつは用意するおとうさんに対して、いらだちを覚えたから。

問二 — 線部 B 「おかあさんの冷たい言い方に、おとうさんはかなりあせったようだ」とあるが、おかあさんが冷たい言い方をしたのはなぜか。説明しなさい。

問三 空欄 X にあてはまることばとしてふさわしいものを、次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 有頂天
- イ 間一髪
- ウ 大団円
- エ 破天荒



問四 ②段落での三人(おかあさん、おとうさん、文)の行動や気持ちについての説明として、適当でないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 二人の結婚のきっかけを知り興奮する文につられ、おかあさんも当時を思い出して気持ちが高ぶった。
- イ おかあさんがおとうさんのことをどう思っているかを考えることで、文は手紙の謎を解くことができた。
- ウ おとうさんは、自分があきらめずに必死に探したからこそ、最後に手紙が目の前に現れたと思っていた。
- エ 文は、自分の名前の由来になった手紙の話に興味をひかれ、知らないうちにおとうさんとの距離が縮まった。

問五 —線部C「おかあさんはかすかに口の端を上げる」とあるが、どのような気持ちが表れているか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 文からの言葉にかたまってしまったおとうさんを見て、手紙が見つけれられるか心配している。
- イ あせった様子の文の姿を見て、宿題をするといって留守番をしたのはウソだったのかと怪しんでいる。
- ウ いつもは謎を出しているおとうさんが、今は文から謎を出される立場になっていて、おもしろがっている。
- エ 文が手紙の謎を解いて、自分と同じように、おとうさんに手紙を探させようとしていて、微笑ましく思っている。

問六 —線部D「文は口をとんがらかした」とあるが、どのような気持ちが表れているか。理由も含めて説明しなさい。

問七 —線部E「わたしは運がよかった」とあるが、なぜそのように思ったのか。説明しなさい。

問八 文は、自分の名前の意味を知ることを通して、どのようにおとうさんと仲直りをしていったか。七十五字以内で説明しなさい。

## 二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

読書の楽しみや効用について、私はこれまでも繰り返し語ってきました。

いつの時代も、読書は素晴らしいものです。思考力を伸ばし、想像力を豊かにし、苦しいときも前進する力をくれる。自己を形成し、人生を豊かにするのに欠かせないのが読書です。その価値はずっと変わらないのですが、<sup>A</sup>「いまこそ」と言いたいと思います。

「本を読まなくなった」とはぜひいぶん前から言われていることです。もう **X** にタコができていてという人もいます。

それで **X** が痛いというならまだいいですが、「それがどうかしましたか？」と聞き直っている人があまりにも多い印象です。

先日、恐ろしいデータを目にしました。「読書時間ゼロ」の大学生が過半数を超えた、というものです(第53回全国大学生生活協同組合連合会による学生生活実態調査)。

53・1%が1日の読書時間を「ゼロ分」と回答)。  
大学で教鞭きょうべんをとっている者としてうすうすわかってい

たことですが、数字を見るとやはり衝撃しょうげきでした。理系の学生が本ではなく論文を読んでいて、実験や計算に多くの時間を使っているというのならまだ理解できますが、文系の学生も本を読まないというのですから驚おどろきです。

では実際、本を読まずに、何をしているのでしょうか？

読書をしていないとはいっても、文字を読んでいないわけではありません。「1」、大量に読んでいます。その多くはインターネットだったり、SNSだったりするわけです。

「本を読まなくても、ネットでいいじゃん」と言う人はいるかもしれません。

「すべてネットの中にあるではないか」と言われれば、まあ、その通りです。毎日膨大な量の情報が追加されているネット上には、最近のニュースだけでなく古今東西のあらゆる物語や解釈かいしゃくや反応ふくが含まれています。ネットの「青空文庫」では、著作権の切れた作品を無料で読むこともできます。

ですから、わざわざ本を読まなくてもネットでいいじゃないかという意見も見当違いちがなものではありません。

【2】、ネットで読むことと読書には重大な違いがあります。それは「向かい方」です。

ネットで何か読もうというときは、そこにあるコンテンツ\*にじっくり向き合うというより、パッパッと短時間で次へいこうとします。より面白そうなもの、アイキャッチ的なものへ視線が流れますね。ネット上には大量の情報とともに気になるキャッチコピーや画像があふれています。それで、ますます一つのコンテンツに向き合う時間は短くなってしまふ。

最近は音楽もネットを介して聴くことが多くなっていますが、ネットでの「向かい方」ではイントロを聴いていることができません。我慢できなくて次の曲を探しはじめてしまいます。【3】、いきなりサビから入るような曲のつくり方をしているという話を、あるアーティストの方から聞きました。

現代人の集中力が低下していることを示す研究もあります。2015年にマイクロソフトが発表したところによると、現代人のアテンション・スパン(一つのことに集中できる時間)はたった8秒。2000年には12秒だったものが4秒も縮み、いまや金魚の9秒より短いと言います。

これは間違いなくインターネットの影響\*でしょう。とくにスマホが普及\*して、スマートフォンで常にいろいろな情報にアクセスしたり、SNSで常に短いやりとりをしたりするようになったことで、ある意味で「適応」した結果です。

このようにネット上の情報を読むのと、読書とは行違として全然違います。

ネットで文章を読むとき、私たちは「読者」ではありません。「消費者」なのです。こちらが主導権を握\*っていて、より面白いものを選ぶ。「これはない」「つまらない」とどんどん切り捨て、「こっちは面白かった」と消費していく感じ\*です。

消費しているだけでは、積み重ねができません。せわしく情報にアクセスしているわりに、どこかフワフワとして何も身につけていない。そのときは「へえ」と思ったけれど、すぐに忘れてしまいます。浅い情報は常にくっついてくるかもしれませんが、「人生が深くなる」ことはありません。

これは情報の内容やツールの問題というより、「構え」の問題です。

著者をリスペクトして「さあこの本を読もう」というときは、じっくり腰を据えて話を聞くような構えになります。著者と二人きりで四畳半の部屋にこもり、延々と話を聞くようなものです。ちよつと退屈な場面があっても簡単に逃げるわけにはいきません。辛抱強く話を聞き続けます。

相手が天才的な作家だと、「早く続きが聞きたい」と言つて寝る間も惜しんで読書をすることもあるでしょう。しかしドストエフスキーと二人きりになって3か月も話を聞かされ続けたりしたら、大概の人は逃げ出したくなります。(やつてみると最高なのですが)。実際、みんな逃げだしつつあるわけです。

逃げ出さずに最後まで話を聞くとうなるか。それは「体験」としてしっかりと刻み込まれます。読書は「体験」なのです。実際、読書で登場人物に感情移入しているときの脳は、体験しているときの脳と近い動きをしているという話もあります。

体験は人格形成に影響します。あなたもきつと「いまの自分をつくっているのは、こういう体験だ」と思うような体験があるでしょう。

辛く悲しい体験も、それがあつたからこそ人の気持ちが変わるようになりたり、それを乗り越えたことで強さや自信になったりします。大きな病気になったり命の尊さを感じる出来事があれば、いまこの瞬間を大事に思えるようになるなど、人格に変化をもたらします。

自分一人の体験には限界がありますが、読書で疑似体験をすることもできます。

読書によって人生観、人間観を深め、想像力を豊かにし、人格を大きくしていくことができます。

読書よりも実際の体験が大事だと言う人もいます。実際に体験することが大事なのはその通りです。でも、私は読書と体験は矛盾しないと考えています。本を読むことで、「これこれを体験してみたい」というモチベーションになることはありますし、それ以上に、言葉にできなかった自分の体験の意味に気づくことができます。

実際の体験を何十倍にも生かすことができるようになるのです。

(齋藤孝『読書する人だけがたどり着ける場所』より)

\*イントロ——曲の始まりの部分。前奏。

\*サビ——音楽の最も盛り上がるどころ。

\*ツール——道具。

\*リスベクト——敬意を持つ。

\*ドストエフスキー——ロシアの作家。

\*モチベーション——しげき刺激、やる気。

【注】

\*教鞭をとる——教師になって学生、生徒に教える。

\*コンテンツ——中身。

\*アイキャッチ——画像や映像で見る人の注意をひきつけ

る。

問一——線部A「あえて「いまこそ」と言いたいと思います」とあるが、なぜ「いまこそ」なのか。大学で学生を教えている筆者の考える理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 理系の学生に比べて、読書をしない学生数が増えることで文系の学生の学力が低下しているから。

イ 過半数を超える学生が一日の読書時間がゼロで、文系の学生でも読書をしない学生が増えているから。

ウ 心配したとおり過半数を超える学生が読書をしなくなるという自分の予感がいままさに的中しているから。

エ 「本を読まなくなった」とさんざん言われ続けてきたので、読書をしないことが当たり前になっているから。

問二 空欄 X に共通して入ることを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 頭      イ 耳      ウ 胸      エ 足

問三 「1」 「3」 にあてはまることばを次の中から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア しかし      イ そこで      ウ むしろ

問四 ——線部B「ある意味で「適応」した結果です」について、後の問い(1)・(2)に答えなさい。

(1) なぜ、人間の集中力が金魚の9秒よりも落ちたのか。理由を説明しなさい。

(2) 筆者は人間が金魚の9秒よりも集中力が落ちたことを「適応」という言葉で表している。そこにはどのような意図があるのか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 疑問      イ 共感      ウ 賞賛      エ 皮肉

問五 ——線部C「実際、みんな逃げだしつつあるわけです」とは、どのような状況から逃げるのか。二十五字以内で、説明しなさい。

問六 — 線部 D 「言葉にできなかった自分の体験の意味に気づくことができます」とあるが、読書をすると言葉にできなかった自分の体験の意味に気づけるとは、どういうことか。その説明として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分では気づけなかった過去の体験の持つ意味を、読書することによって考えられる十分な時間が生まれてくること。

イ 言葉の専門家である作家の書く物語の中から、自分の生き方や人生を考えることができ、それを人に説明する方法を学べること。

ウ 現実には自分が体験できないようなことも、本の中の主人公を通して疑似体験できるので、自分の世界が広がり、言葉も豊富になること。

エ 自分が体験したことと重なるような内容を本の中に見つけたとき、そこに書かれている言葉によって、自分の体験を深く理解できること。

問七 この文章における「読書」と「消費」とはどのようなことか。その違いを説明しなさい。



三

次の①～⑤の——線部のカタカナを漢字にしなさい。

- ① リエキを考<sup>レ</sup>えて商<sup>レ</sup>売をする。
- ② 試<sup>レ</sup>合の結果をホウコクする。
- ③ 長<sup>レ</sup>年乗<sup>レ</sup>つていた車<sup>レ</sup>がコシヨウする。
- ④ ふと<sup>レ</sup>んを押し入<sup>レ</sup>れにシユウノウする。
- ⑤ 栄<sup>レ</sup>養が足りていないところをオギナ<sup>レ</sup>う。

